〈特集論文〉

多職種連携を深化させるリフレクティングへのケースビネットの活用 ―ケースビネットの定義や意義の明確化―

小坂素子[1]，松本光寛[2]，吉野亮子[3]，岡美智代[2]，上杉裕子[4]，川村千恵子[5]，
木村聡子[6]，瀬在泉[7]，二瓶映美[8]，野呂瀬崇彦[9]，樋口倫子[10]
1．神戸女子大学　2．群馬大学大学院　3．関西医療大学　4．金城学院大学
5．甲南女子大学　6．京都光華女子大学　7．防衛医科大学校
8．秀明大学　9．帝京大学　10．明海大学

Use of Case Vignettes for Reflecting to Deepen Multidisciplinary Collaboration: Clarify the definition and significance of case vignettes

Motoko Kosaka[1], Mitsuhiro Matsumoto[2], Ryoko Yoshino[3], Michiyo Oka[2], Yuko Uesugi[4], Chieko Kawamura[5], Satoko Kimura[6], Izumi Sezai[7], Emi Nihei[8], Takahiko Norose[9], Noriko Higuchi[10]
[1.] Kobe Women's University　[2.] Gunma University, Graduate School of Health Sciences
[3.] Kansai University of Health Sciences　[4.] Kinjo Gakuin University　[5.] Konan Women's University
[6.] Kyoto Koka Women's University　[7.] National Defense Medical College　[8.] Shumei University
[9.] Teikyo University　[10.] Meikai University

キーワード
多職種連携　multidisciplinary collaboration
transdis ciplinary
ケースビネット　case vignet

Ⅰ．はじめに

我が国の高齢化は諸外国に例を見ない速度で進行し，今後も 75 歳以上の人口割合が増加するといわれている。厚生労働省を中心に，要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしい生活が送れるよう，地域包括ケアシステムの構築が進められている[1)]。その中で，保健・医療・福祉の連携・協働は必須であり，様々な現場で多職種が連携していかなければならない。これらの多職種連携は，医療の高度細分化に伴う病院専門職の連携，生活の質を念頭に置いた医療・保健・介護・福祉の連携，生活の支援に関わる地域包括ケアに関する専門職種の連携，退院支援などの病院と地域との連携など日常のあらゆる場面で多職種連携が求められており，実践されている。また，地域ケア会議などの場であれば，専門職だけでなく地域住民などの非専門職との連携[2)]も求められてくる。成瀬ら[3)]は多職種連携の困難にはコミュニケーションをとる上での困難やサービス提供上の困難，チームとして機能する上での困難があり，それぞれの職種が自らの壁を破り職種間の認知の相違を共有し，同じ方向性で行動するきっかけつくることが必要としている。多職種連携の促進には，連携する職種が互いを知り，理解し，共に問題解決や意思決定支援を行うことが重要である。

今回，多職種間連携を深化させるリフレクティングに関する研究へのケースビネットの応用可能性を検討するために，国内のビネットを用いた先行研究の文献レビューを行った。そこから得られた結果を報告する。

Ⅱ．ケースビネットとは

ビネット（vignette）とは，本来は周りをぼやかした肖像写真のことをいうが，ビネット調査等に用いられるビネットとは，ある架空の個人もしくは世帯について，様々な情報が記述してあるカードのことを意味している[4)]。

Ⅲ．目的

「相互理解で多職種連携は進化する―リフレクティングの活用によるフィージビリティスタディ―」において，ケースビネットの応用可能性について検討することを目的とする。

Ⅳ．方法

日本におけるケースビネットを用いた研究の現状を把握するために，医学中央雑誌 WEB 版，J-stage，CiNii，google scholar を用いた。キーワードは「ケースビネット」とし，会議録は除外した。抽出内容は，研究論文の発表年，ジャーナル，研究対象者，ケースビネットの定義，ケースビネットの概要（文字数，ビネット数，ビネットの属性，研究デザイン）などとし，整理表を用いて検討をした。

Ⅴ．結果

検索の結果，医中誌 23 件，J-stage 4 件，CiNii 4 件，google scholar167 件のうち，ケースビネットを用いていない文献，重複している文献を除外し，抽出内容の記載がある 12 件の文献を選出した。ハンドサーチで入手した 15 文献を加えた 27 件を対象文献とした。

１．対象文献の概要（表１）

ケースビネット研究の研究対象者は，学生や専門職，調査の目的とした対象者やランダム抽出した一般人等だった。研究分野は心理学や社会学の分野で多く研究がされていた。研究デザインは量的研究が 21 件，質的研究が３件，その他の研究が３件だった。抽出条件に合う文献の中で最も古いものは 1996 年だった。研究目的は，ケースビネットを用いた研究が出始めた頃は，「エイズ患者・感染者に対するイメージや態度」や「児童虐待の認識と通告行動」など影響要因を明らかにする問題提起を目的とした研究が多かったが，最近はどのように対応するのかなどを問う問題解決を目的とした研究が増えている。研究の対象は，大学生とその保護者や，教育を受けているグループと受けていないグループ，日本の専門職と外国のそれに該当する職種などのグループ比較を目的としたものが 17 件と多かった。

２．ケースビネットについて

調査文献に述べられているケースビネットの定義やケースビネットを使用した目的からキーワードを抽出した（表２）。ケースビネットには，【短い文章で記述】８件，【架空の人物や状況の設定】７件，【リアリティ】４件，が抽出された。ケースビネット調査のキーワードは，【深層の行動･態度を調査できる】13 件，【投影的な方法】５件，【条件を調査者が組める】３件【心理的障壁を軽減】３件，【スティグマなど状況設定が困難な変数の調査にも有効】２件，【比較調査が可能】１件が抽出された。

３．ケースビネットを用いた研究パターン（表３）

ケースビネットの概要と研究目的，研究方法から大きく３つに分けられた。ここでは，27 文献のうち，ビネットが提示されている文献のみを対象とした。

一つ目は，短いビネットを用いてさまざまなパターンを示して判断や意識を問う質問紙調査，二つ目は 200 ～ 500 字程度のケースビネットを用いた態度や行動を問う質問紙調査，三つ目は 200 ～ 500 字程度のケースビネットを用いて対応や行動を問うインタビュー調査があった。ケースビネットの概要と研究目的，研究方法から研究のパターンが大きく３つに分けられた。

１）短いビネット（50 字以下）で多数のパターンを示したもの

一つ目は，50 字以下の短いビネットを用いて，さまざまなパターンを示して判断や意識を問う質問紙調査であった。虐待に関する研究で多く取り入れられていた。ビネット数が 20 個から 40 個の多数のケースビネットを提示し，研究対象者の意識や判断を調査する研究がほとんどだった。また，大学生とその保護者に調査を行い，世代間での比較調査にも使われていた。

研究の一例として，先行研究で明らかになっている虐待のパターンをケースビネットとし，児童福祉

表１　調査対象文献と研究の概要

文献番号	著者	論文タイトル	発行元	研究デザイン	研究の概要	目的			対象	
						問題解決	問題提起	対象把握	グループ比較	個人
1	高橋重宏ら	「子どもへの不適切な関わり（マルトリートメント）」のアセスメント基準とその社会的反応に関する研究（3）	日本総合愛育研究所紀要 ,33, 127-141,1996	量的	専門職種間の不適切な関わりへの認識の差異を明らかにし、今後のチームアプローチに関する議論を展開する基礎データを得ること		○		○	
2	荒川長巳	ケースビネット法を利用したシミュレーションによるHIV感染者のカミングアウト(感染事実の表明)に関する研究	日本公衛誌,44（10）,749-759,1997	量的	質問紙上でカミングアウトをシミュレーションしてその影響を検討する		○		○	
3	大竹智	子どもの不適切な関わりに関する短大生の意識	帯広大谷短期大学紀要,35,91-109, 1998	量的	短大生の虐待に対する意識を把握し、その予防について考察する			○	○	
4	佐藤幸子ら	子どもの虐待に対する高校生の意識と意識形成の世代伝播	山形保健医療研究, 6,9-15, 2003	量的	高校生を対象に子どもの虐待に関する意識の実態及び虐待に対する意識形成の世代間伝播について明らかにする		○		○	
5	八重樫牧子	大学生とその母親の児童虐待意識の関連性	川崎医療福祉学会誌,14(2), 415-423,2005	量的	社会福祉の仕事に携わることを目指している大学生を対象に児童虐待に関する意識を明らかにする		○		○	
6	上野加央里ら	看護師の児童虐待認識に関する研究	川崎医療福祉学会誌,19(2), 379-385,2010	量的	看護師の虐待認識傾向を知り, 学習経験が与える影響について検討		○		○	
7	林拓也	ヴィネット方式による調査設計の応用可能性―「女性のライフコース希望」と「有配偶者の地位評価」の調査事例に基づいて	人 間文化研究科年報, 25, 147-158,2010	量的	政策分野以外の社会学的テーマに対するヴィネット調査の応用可能性を探索することを目的に、ヴィネット調査設計を導入することで、既存の調査研究と比較してどのような示唆が得られるのか検討			○	○	
8	小山明日香ら	精神障害を有する人に対する一般地域住民のイメージ	日本社会精神医学会雑誌,20(2),1116-127,2011	量的	統合失調症、大うつ病性障害及びアルコール依存の3つの障がいについての全国の一般地域住民のイメージを明らかにすること		○			○
9	塩谷芳也	ビネット調査による階層帰属メカニズムの検討	理論と方法, 27(2), 243-258,2012	量的	階層帰属の生成過程を説明する数理モデルの経験的妥当性をビネット調査により検証	○			○	
10	岩清水伴美ら	子ども虐待に関する保育士・幼稚園教諭の知識と対応行動	小児保健研究,71,2,273-281,2012	量的	保育者の虐待の知識と虐待への対応の実態の把握と、今後の課題を明らかにする		○			○
11	及川裕子ら	乳幼児を持つ親の子ども虐待の認識度と被養育体験・親性との関連	園田学園女子大学論文集,46,59-67,2012	量的	乳幼児をもつ親の子ども虐待の認識度と、親がその母親から受けた被養育体験、親性の発達との関連について明らかにすること		○		○	
12	中川敦夫	精神科研修医のうつ病治療選択に関する日米比較：ケースビネット調査	Depression Journal,3(1),26―28,2015	量的	日米精神科医の治療選択を比較検討し、ガイドラインとは異なるうつ病診療の現状や問題を浮き彫りにすること	○			○	
13	佐藤桃子	デンマークにおける課題を抱える家族と子どもへの支援	季刊家計経済研究 SPRING,106, 69―82,2015	質的	課題を抱える子供と家族への支援において、関係機関や専門職はどのように連携し、どのような社会資源を活用しているのかを明らかにすること	○			○	
14	大日善晴	ラベリングと社会的距離－児童養護施設退所者に対するまなざしを通して―	社会福祉,56、9-24,2015	量的	児童養護施設退所者を事例に、ラベリングが社会的距離に与える効果について検討を行う		○		○	
15	飯田昌子	HIV陽性者に対する態度の形成要因について	日本エイズ学会誌 19, 47-52,2017	量的	HBV陽性者との比較を通して、HIV陽性者に対する態度の形成要因を明らかにすることを目的	○			○	
16	山本達人	学校に対する保護者の「意見・要望」研究へのビネット調査の応用可能性の検討	東京大学大学院教育学研究科紀要 57, 21-31,2017	質的	学校に対する保護者の「意見・要望」のビネットを用いて、保護者と教員に対するインタビューを通じてそれらに対する両者の認識や評価を問う		○		○	
17	久保恵理子	スウェーデン・日本における認知症高齢者の家族介護者支援に関する比較研究：支援者の家族視点に注目して	大阪大学大学院人間科学研究科紀要,44,147-165,2018	質的	スウェーデン・日本の認知症高齢者と同居する家族介護者への支援システムを明らかにし、支援における「家族視点」を引き出すこと	○			○	
18	西田江里ら	ビネット法を用いた女子短期大学生における摂食障害に関するメンタルヘルスリテラシー調査	長崎短期大学研究紀要,30,15- 22,2018	量的	Mondらが作成したAN、BN、BEDのビネットの日本語版を用いた自記式調査票により、日本人女子短期大学生に調査		○			○
19	樫原潤ら	医療従事者が「新型うつ」事例に対して抱くイメージの実態把握	心理学研究 ,89(5), 520-526, 2018	量的	目的：新型うつの場合に重症度等が相対的に低く見積もられてしまうのかどうかについて検討する		○		○	
20	松田茂樹	ヴィネット調査を用いた子育て支援策が出生行動に与える効果の研究	人口学研究 ,55, 41-53, 2019	量的	ビネット調査を用いて、子育て支援策が追加出生意欲に与える効果の分析	○				○
21	野村裕美	ビネットを活用した事例学習の試み	評論・社会科学,131, 23-36,2019	その他	ソーシャルワーカーの研修でのケースビネットを用いた学習の効果を検証	○				○
22	石崎美保ら	看護大学生の児童虐待の認識と通告行動に影響する要因	千里金蘭大学紀要, 16,63-69, 2019	量的	看護学生の児童虐待の認識の特徴と通告行動に影響する要因を明らかにする		○			○
23	池田紀子	学校現場における児童虐待の重症度のレベル判断への影響要因	ルーテル学院研究紀要,53,35-48,2019	量的	児童虐待の重症度のレベル判断と個人・組織要因の関連を明らかにする	○				○
24	宮本悦子	矯正施設における摂食障害被害者の万引き行動への対応	心身医学,60 (5), 384-390, 2020	その他	万引き行動の特徴、社会的背景を考察し、万引き行動を伴う摂食障害被収容者への対応の検討	○				○
25	四宮美佐恵	大学生の持つ子どもの虐待に関する認識	新見公立大学紀要 41,85-90,2020	量的	大学生の子どもの虐待に関する認識を明らかにし、若い世代の子どもの虐待予防に関する意識啓発のために必要な支援の示唆を得る	○				○
26	廣金和枝	保育士要請課程入学者の児童虐待に関する教育へのレディネス（2）	小児保健研究 ,79(6),629-635,2020	量的	虐待に対する正答率と学習経験との関連	○			○	
27	鈴木あおい	ソーシャルワーク教育においてロールプレイを活用する意義についての一考察：自分に働きかけることを体験する授業の試み	立教大学コミュニティ福祉学会 まなびあい ,14, 153-160 ,2021	その他	社会福祉を学ぶ実習前の学生を対象とした授業でロールプレイを活用する意義について明らかにする	○				○

表２　ケースビネットに関するキーワード

	キーワード	表１による文献番号
ケースビネット	短い文章で記述	6,9,16,17,20,21,25,26
	架空の人物や状況の設定	1,7,11,16,18,20,26
	リアリティ	7,13,16,26
ケースビネット調査	深層の行動・態度を調査できる	1,2,6,7,10,11,13,16,18,20,21,23,26
	投影的な方法	2,15,20,21,27
	条件を調査者が組める	7,9,23
	心理的障壁を軽減	16,26,27
	状況設定が困難な事例の調査にも有効	18,26
	比較調査が可能	16

表３　ケースビネットを用いた研究パターン

文献番号	研究デザイン	ビネットの概要	文字数	症例（ビネット）数	合計文字数	ビネット作成の留意点
短いビネット（50字以下）で多数のパターンを示した質問紙調査						
1	量的	子どもへの不適切な関わりに関する意識	13-35	40		「子どもへの不適切な関わり」に該当する想定事例文（ビネット）
3	量的	虐待意識	13-35	39	不明	高橋らが作成した「虐待およびマルトリートメント」で用いられた調査票
4	量的	虐待意識調査	13-35	39	不明	ビネット項目について虐待の意識を検証
5	量的	虐待意識	35弱	39	1365	虐待意識については、高橋らのビネット調査の39項目を使用
6	量的	児童虐待	約10-30	17	510以下	ビネット調査を使用して児童虐待認識について行なった鈴木ら ,および高橋ら の方法を用いた学生の児童虐待に対する学習経験の有無で比較
9	量的	学歴、職業、収入	21		490	階層帰属の生成過程を説明する数理モデルの経験的妥当性をビネット調査により検証
10	量的	子ども虐待に関する知識と対応行動	13-35	39	不明	高橋らの「子どもの不適切な関わり」の39項目
11	量的	虐待意識	13-35	31		高橋らが開発した39項目のうち因子分析をして抽出された31項目の簡易版
25	量的	虐待	13-28	39		高橋らが開発したビネット調査を活用
26	量的	虐待	16-30	20	320-600	学生の虐待意識
200字～500字程度のケースビネットを用いた態度や行動を問う質問紙調査						
2	量的	性行為による感染のカミングアウトの有無	217-245	2	462	診断の経過や感染の経緯、カミングアウトの有無
8	量的	統合失調症、大うつ病性障害、アルコール依存症の3つの障がいのビネット	1000字程度	3	3000字程度	ビネットは、経験ある精神科医によってDSM-IVおよびICD-10のそれぞれの診断基準を満たしていることを確認。いずれのビネットも初発であり、社会生活機能が一定以上低下しており、精神科的治療が必要な状態にある患者を想定して作成
12	量的	うつ病治療の選択について日米比較	195,269	2	464	ケースビネットでは軽症と中等症を想定したうつの2症例を提示したが、軽症、中等症の重症度はあえて提示せず、対象者に症例の短い記述を元に回答
14	量的	児童養護施設退所者というラベリングが社会的距離に影響を与えるかどうか	116,181	2	307	児童養護施設退所者というラベル情報が付与された2種類と、態度に関する情報が3種類あり、合計6種類の組み合わせで調査
15	量的	HIVまたはB型肝炎ウイルス陽性者の仮想事例	461	4	1844	
18	量的	摂食障害に関する知識	453+512+495	3	1460	神経系やせ症(AN)、神経性過食症(BN)、過食性障害（BED）
200字～500字程度のケースビネットを用いて対応や行動を問うインタビュー調査						
13	質的	虐待事例	250前後	3	750	専門家の虐待への支援方法、判断
16	質的	保護者の学校への意見・要望	92と85	2	177	
17	質的	認知症高齢者とその家族に関する記述	145前後	2	約300	介護福祉士国家試験の2010年から2012年の試験問題のうち、認知症高齢者とその家族に関する事例問題2つを日本での一般的な事例として選定。複数の事例を用意することで、調査においてインタビュイーが両方もしくは答えやすいケースに回答しやすいように配慮

の現場で，子どもへの不適切なかかわりがどのようにとらえられ，認識されているか，通報の必要性や児童相談所での対応に関する意識を明らかにするために調査したものが挙げられる。その中で，「親がパチンコをしている間，乳幼児を車に残しておく」というケースビネットを提示し，どのように認識するか，どのように対応するかなどを調査していた。

２）200 字～ 500 字程度のケースビネットを用いた態度や行動を問う質問紙調査

二つ目は 200 字～ 500 字程度のケースビネットを用いた態度や行動を問う質問紙調査である。これは，調査が難しい摂食障害や精神疾患，犯罪や経済問題などの対象をテーマに挙げられていた。ケースビネットは理解しやすい短いストーリーで表現され，ビネットの数も数個と限られていた。このパターンの調査はビネットで示されているテーマによる意識や様々な影響を調査したものが多くあった。

研究の一例として，西田ら（文献番号 13）の「ビネット法を用いた女子短期大学生における摂食障害に関するメンタルヘルスリテラシー調査」を挙げる。この調査では，Mond らが作成したビネットをもとに作成していた。こちらの調査では，ビネット調査が疾患や患者に対する Stigma 等の調査にも用いられているという理由から，ビネットを使用されていた。調査方法は，ビネットを提示し，このビネットに対し，研究対象者のビネットに対する対象理解や治療の必要性，摂食障害に対する価値判断などを質問紙で調査していた。

３）200 字～ 500 字程度のケースビネットを用いて対応や行動を問うインタビュー調査

三つ目は 200 字～ 500 字程度のケースビネットを用いて対応や行動を問うインタビュー調査である。このパターンも，そのケースに関わる人たちがイメージしやすい短いストーリーで表現されており，ビネット数も２，３個と少数だった。調査は，ケースビネットの内容をみて，研究対象者がどのようにとらえるか，どのように関わるかなどについてインタビューを行っていた。保護者と教員や，日本と他国の専門職との違いなど，関わる人の比較研究もおこなわれていた。

研究の一例として，久保（文献番号 11）が行った「スウェーデン・日本における認知症高齢者の家族介護者支援に関する比較研究：支援者の家族視点に注目して」がある。これは，スウェーデンと日本でサービスを提供する支援者が，家族介護者の負担をどのように捉えるのか，負担に対してどのような対応をとるかについてインタビュー調査し，比較することで，両国の認知症高齢者の家族介護者支援の意識や判断，支援の特徴について明らかにしたものである。ケースビネットは，介護福祉士国家試験の試験問題のうち，認知症高齢者とその家族に関する事例問題を日本での一般的な事例として選定し，作成していた。複数の事例を用意することで，調査においてインタビュイーが両方，もしくは答えやすいケースについて回答できるように配慮していた。

Ⅵ．考察

１．ケースビネットの特徴について

状況設定の困難な事例（虐待，摂食障害，精神疾患，スティグマ，性感染症や万引きなど）がケースビネットとして使用されていた。この理由として，架空の人物や状況設定のため，状況設定の難しいテーマについての意識や行動について調査することが可能であることが考えられる。廣金（文献番号 17）も，「ビネットを提示してそれらに対する評価や認識を調査することで，状況設定が困難な変数に関する調査を可能にすると述べている。また，架空の状況であることから回答者の心理的障壁が軽減できる効果がある」とも述べており，山本（文献番号 14）もビネット調査の利点には，調査対象者にあらかじめ架空の設定であることを伝えておくことで回答者の心理的障壁を下げることが可能になる点を挙げている。

また，ケースビネットは短いストーリーに対する回答を得て，対象者がどのように考えているのか把握することができることも特徴といえる。ケースビネットの多くが，能力を判定したり，正解を求めたりしない場合に用いられており，ケースビネットはもともとぼやかした肖像写真のことをいうが，あいまいな設問から回答者の心の内面や性質を明らかにしようとする投影法であり，松田（文献番号２）はケースビネットで得られた回答は，架空の設定であるが，現実世界における人々の意識と行動と類似す

ると述べている。

その他の特徴として，ケースビネットは架空の設定であるゆえに，研究者が対象者の反応に影響すると想定される要因を選定することができることが挙げられる。ケースビネットは短いストーリーや例文，キーワード形式，会話形式，絵，カードなど様々な表現方法で提示をされるが，提示方法も研究者が研究対象者の特徴や調査目的に応じて選択することができる。しかし，ケースビネットは，詳細な記載ではなく，短く簡潔で，あいまいな設定にも関わらず，例えば疾患名や登場人物の状況などはイメージしやすいものでなくてはならないというのも，特徴といえる。

以上のことから，ケースビネットとは，具体的な架空の人物や状況設定をしたものであり，短いストーリーでイメージしやすく，研究者が具体性と研究対象者の反応に影響する要因を自由に統制できるものと，定義することができる。

２．多職種連携を深化させるリフレクティングへの有効性

同じケースビネットを用いた複数グループでの比較研究の先行研究も多数あり，山本（文献番号 14）がビネット調査のインプリケーションとして，同一調査を異なるアクター間で実施するという分析枠組みを用いることができる点を挙げていることからも，架空のケースビネットを提示し意識や行動を問う調査は有効であると考える。ケースビネットは正解を問うものや能力を判断するものではなく，人々の意識的行動的反応を知ることができるという特徴をもっている。それも，織田[4]は，自分とは直接の利害のない架空のケースについて社会一般の基準から判断するため，調査対象者の状況によるバイアスをある程度除去することができ，自分自身の状況について評価するような方法と比べれば客観的な回答が得られると述べている。このことから，ケースビネットを用いてリフレクティングを行った場合，個人のバイアスが軽減され，その専門性や職種の特徴が反映できる結果が得られると考えられる。以上のことから，ケースビネットの「多職種連携を深化させるリフレクティングの活用についての研究」への導入は有効であると考える。

Ⅶ．まとめ

ケースビネットを用いることで，投影的な方法で対象者の深層の行動・態度を調査することができ，状況設定が困難な調査にも有効であることがわかった。また，架空の設定のため対象者の心理的障壁を軽減することができ，比較調査も可能であることから，多職種連携の場では研究調査だけでなく，学修研修の場にも応用可能ではないかと考える。

本プロジェクトは日本保健医療行動科学会の研究助成を受けて実施している。

引用文献

１）厚生労働省：地域包括ケアシステム，https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/（2022 年 9 月 13 日検索）

２）小谷和彦 , 小池創一 , 松村正巳：シリーズ　地域医療を実践する内科医とは　具体的な地域医療活動　地域医療における多職種連携（概説），日本内科学会雑誌 , 107 (11)：2294-2300, 2018

３）成瀬和子 , 宇多みどり：在宅ケアにおける多職種連携の困難と課題 , 神戸市看護大学紀要，22：9-15, 2018

４）織田輝哉：ヴィネット方式の特徴と調査の概要：適正な年金給付額の研究，季刊社会保障研究 , 28 (1)：34-44，1992